

日・韓両言語において主題助詞と主格助詞は先行文脈に基づいて使い分けられているか

○田原俊司 伊藤武彦 朴媛淑
(神田外語大学) (和光大学) (東京大学)

日本語には主題助詞ハ、主格助詞ガ、韓国語には主題助詞-eun/neun、主格助詞-i/gaが存在し、日・韓両言語において統語上、両助詞の使い分け及び獲得の過程が類似したものであることが明らかにされている(田原ら、1987a)。また、談話上でも両助詞の使い分けが日・韓両言語において類似したものであることが明かとなってきている(田原ら、1987b)。しかし、日・韓両成人母語話者が談話上、類似した主題助詞と主格助詞の使い分けを行っているとしても、その際、どのようなメカニズムに基づいて両助詞を使い分けしているかは現在、明らかにされていると言い難い。このメカニズムを検討するために、次の3つの仮説を立てた。第1の仮説は、主格の標識を初出の情報に、主題の標識を既出の情報に用いるというものである(以下この仮説を、初出・既出仮説と呼ぶ)。これに対する第2の仮説は、主題助詞と主格助詞の使い分けが、ある発話をしようとするその直前の発話の最後の名詞(句)に影響をうけるとするものである。ある発話がその発話の直前の発話の最後の名詞(句)と同一の名詞(句)で始めれば、その名詞(句)に対して主題助詞を、同一でないとき、またはテキストの最初の発話であれば主格助詞を用いる(以下この仮説を、近接性仮説と呼ぶ)。第3の仮説は、Tomlin(1986)のReferential Density(RD)を参考にしたものである。RDとは、Tomlinによれば「その節までに出現した指向対象の総数÷節の総数」で計算される値である。第3の仮説はRDを「その節より前に出現した指向対象の総数÷その節の前の節までの節の総数」(以下、RF)と置き換え、それぞれの発話の時点でRF値の高い名詞(句)ほど主題助詞が、RFの低い名詞(句)ほど主格助詞が用いられやすく、その名詞(句)に対して主題助詞の用いられる確率はRFの値に一致すると仮定するものである(以下この仮説を、先行頻度仮説と呼ぶ)。なお、仮説1、2、3はいずれも先行文脈の要因から主題助詞と主格助詞の使い分けを予測する仮説である。本研究の目的は、物語を伝達する際、日・韓両成人母語話者はそれぞれ主題助詞と主格助詞の使い分けを以上の三仮説のいずれかに基づいて行っているのか、それとも以上に

あげた三仮説では説明されない他のメカニズムに基づいて行っているのかを明らかにすることである。

方法

被験者:日本語成人母語話者は東京及び東京の近郊の大学生、韓国語成人母語話者についてはソウル及びソウル近郊の大学生で、各群10名(男女半数)。実験時の平均年齢は両群とも20歳1ヶ月であった。

実験材料:4枚で1組の絵カードを1課題として8課題。4枚1組の絵カードはそれぞれ、1、2枚目では異なる動物が個々に行為をし、3枚目では1枚目の動物が2枚目の動物を叩く・かじる等の行為をし、4枚目では3枚目で被動作主である動物(2枚目の動物)が3枚目で動作主である動物(1枚目の動物)に何らかの行為をし返す(したがって、4枚目で動作主の動物は3枚目で被動作主の動物であり、4枚目で被動作主の動物は3枚目で動作主の動物である)というように描かれている。

手続き:「今から、4枚1組の絵カードを8組見せますから、物語を作ってください。それをテーブルコーダーに吹き込んで、子どもに聞かせようと思います。そのとき、子どもには、今あなたが見ている絵カードを見せませんので、絵カードを見ない子どもにも、わかるように物語を作ってください。それから、物語は、私が指さしたものについて順番に作ってください。また、2枚目と3枚目の絵カードの間に”(1枚目の絵カードの動物)が(2枚目の絵カード動物)を見つけました”というナレーションを入れますので、3枚目以降の物語はそのナレーションに続いて作ってください。」という指示をした。「・・・しているの」という被指示物の欠如した文のときには、「子どもには絵カードを見せませんので、絵カードを見ない子どもにもわかるように話を作ってください。」という指示を、被指示物を指さして30秒以上しても物語を作らないときには、「どうしているの」という発話を促す問いを与えた。実験者の絵カードの動物を指さす順番は1、2枚目では個々の動物を指さし、3、4枚目では以下の4条件に分けた。第1の条件は、3、4枚目の絵カードの動作主をそれぞれ指さす場合(以下A→A条件)、第2は、3枚目の絵カードでは動作主を、4枚目の絵カードでは被動作主を指さす場合(A→P条件)、第3は、3枚目の絵カードでは被動作主を、4枚目の絵カードでは動作主を指さす場合(P→A条件)、第4の条件は、3、4枚目の絵カードの被動作主をそれぞれ指さす場合(P→P条件)である。実験に際しては、8課題をランダムに2課題づつ4組に分け、それぞれの組に対して指さす4条件をランダムに割り当てた後、各課題をランダムに被験者に提示した。

Table 1
各条件における被指示物の例

条件	1枚目	2枚目	ナレーション	3枚目	4枚目
A→A	羊が歩いている	馬が休んでいる	羊が馬を見つけました	羊が馬を叩く	馬が羊を叩き返す
A→P	羊が歩いている	馬が休んでいる	羊が馬を見つけました	羊が馬を叩く	羊が馬に叩き返される
P→A	羊が歩いている	馬が休んでいる	羊が馬を見つけました	馬が羊に叩かれる	馬が羊を叩き返す
P→P	羊が歩いている	馬が休んでいる	羊が馬を見つけました	馬が羊に叩かれる	羊が馬に叩き返される

下線は実験者によって指さされた動物を示す

Table 2
RFの値

絵カード	1枚目	2枚目	ナレーション	3枚目	4枚目
1枚目の動物	<u>0.00</u>	1.00	0.50	<u>0.67</u>	<u>0.75</u>
2枚目の動物	0.00	<u>0.00</u>	0.50	<u>0.67</u>	<u>0.75</u>

下線は実験者によって指さされた動物を示す

3枚目と4枚目は条件によって指される動物が異なる

Table 3
助詞の使用パターン (韓国語)

1	2	3	4	条件	A→A	A→P	P→A	P→P	合計 (%)	①	②
SSSS	2	2	1	3	8(10.0)	0	8				
SSST		1	1	2	4(5.0)	0	25				
SSTT	14	15	15	11	55(68.8)	100	50				
TTTT	1		1	2	4(5.0)	0	0				
STTT	2		1	1	4(5.0)	0	0				
TTST	1	1			2(2.5)	0	0				
SSTS		1	1		2(2.5)	0	17				
SSSモ				1	1(1.3)	-	-				
合計	20	20	20	20	80(100.1)	100	100				

T: -eun/neun, S: -i/ga
 A: Agent, P: Patient
 ①: 初出・既出仮説による予測値(%)
 ②: 先行頻度仮説による予測値(%)
 □: は近接性仮説により予想される反応を示す

予測

成人母語話者が先行文脈に基づいて物語を伝達するという課題において、主題助詞(以下、Tと略記)と主格助詞(以下、Sと略記)の使い分けを

1、初出・既出仮説に基づいて行ったとすれば、4条件のいずれにおいても本実験課題では助詞の出現パターンとしてSSTTパターンが出現することが予想される。ここで助詞の出現パターンとは1、2、3、4枚目の絵カードの被指物にそれぞれ言及して物語を作る際、どのような助詞を用いたかを1~4枚目の順に示したものであり、SSTTパターンでは1、2枚目で主格助詞、3、4枚目で主題助詞が用いられることを示している。SSTTパターンが出現することが予想されるのは、本課題において、1、2枚目の絵カードは動物が初出のものであるのに対して、3、4枚目の絵カードの動物はいずれも既出のものだからである。

2、近接性仮説に基づいて行ったとすれば、A→A条件ではSSSTパターンが、A→P条件ではSSSSパターンが、P→A条件ではSSTSパターンが、P→P条件ではSSTTパターンが出現することが予想される。Table 1は実験で用いられた1つの課題を例として、各条件で実験者がどの動物を指さすかを示したものである。1、2枚目の絵カードでは動物がいずれの条件においても初出のものであり、その発話の直前の名詞と同一ではないのでSが用いられる。A→A条件では3枚目で実験者の指さす動物(羊)とナレーションの最後の名詞(馬)が一致しないのでSが、4枚目では実験者の指さす動物(馬)とその直前(3枚目)の発話の最後の名詞(馬)が一致するのでTが用いられる。以下、A→A条件以外の各条件の出現するパターンを同様の方法で予測した結果が上述した各パターンである。

3、先行頻度仮説に基づいて行ったとすれば、4条件いずれにおいても”SSTT”、”SSST”、”SSTS”、”SSSS”の各パターンがほぼ6:3:2:1の頻度の割合で出現し、また、3枚目の絵カード以上に4枚目の絵カードで主題助詞が用いられることが予想される。本課題では、それぞれの動物に対する各発話におけるRF値はTable 2に示す値となる。ここで先行頻度仮説では各RFの値をその絵カードの動物を指さしたとき主題助詞が使用される確率と仮定し

Table 4
助詞の使用パターン (日本語)

1	2	3	4	条件	A→A	A→P	P→A	P→P	合計 (%)	①	②
ガガガガ				1	2(2.5)	0	8				
ガガガハ				1	4(5.0)	0	25				
ガガハハ	17	12	14	10	53(66.3)	100	50				
ハハハハ				1	1(1.3)	0	0				
ガハハハ	3	3		3	9(11.3)	0	0				
ガガハガ				1	1(1.3)	0	17				
ガモハハ				1	6(7.5)	-	-				
ハモガハ				1	1(1.3)	-	-				
ハガハハ				1	3(3.8)	0	0				
合計	20	20	20	20	80(100.3)	100	100				

A: Agent, P: Patient
 ①: 初出・既出仮説による予測値(%)
 ②: 先行頻度仮説による予測値(%)
 □: は近接性仮説により予想される反応を示す

ており、もし先行頻度仮説が正しいとするならば、1、2枚目の絵カードで指さす動物はいずれもRF値が0.00であるので主格助詞が用いられることになる。これに対して、3、4枚目で主題助詞を用いるSSTTパターンの出現する条件付き確率は $0.67 \times 0.75 \approx 0.50$ となる。以下、SSST、SSTT、SSTS、SSSS各パターンの条件付き確率を同様に計算し、各パターンの出現頻度の予測値の割合を算出したのが上述の値である。

結果と考察

Table 3,4は、各条件における助詞の使用パターンを示したものである。Table 3,4の結果は、先行文脈に基づいて物語を伝達する課題において、主題助詞と主格助詞の使い分けが近接性仮説に基づいて行われていないことを示すものである。近接性仮説では指さす条件により助詞の出現するパターンが異なることを予測しているが、本実験の結果はこの予測を支持しない。

Table 3,4でSSTTパターンが圧倒的多数出現したということは、一見、初出・既出仮説を支持しているように見える。しかし、初出・既出仮説ではSSTT以外のパターンの出現を想定していないのに対して、SSTT以外のパターンも多数出現しており、初出・既出仮説だけではこれらのパターンの出現を説明することができないことは明かである。

先行頻度仮説では、SSTT:SSTT:SSTS:SSSS各パターンの出現頻度の比率を6:3:2:1と予測したが、この予測は支持されないばかりか、各パターンの出現頻度の順番さえ予測することができなかった。このことは、先行頻度仮説による説明が妥当性を欠いたものであることを示している。

本研究は、SSTTパターンが多かったことから、日・韓両成人母語話者が既出のものに主題助詞、初出のものに主格助詞を用いる傾向がある、すなわち、主題助詞・主格助詞の使い分けが既出・初出といった先行文脈に影響されるということ否定するものではない。しかし同時に、先行文脈は主題助詞、主格助詞の使い分けを一義的に決定しないことも明かとなった。今後、主題助詞と主格助詞の使い分けに影響を及ぼす要因をさらに検討する必要がある。